



日本記者クラブ記者会見

## グローバルなペレストロイカを

アンドレイ・サハロフ博士

1989年10月26日

page 2

ペレストロイカは歴史的必然  
パレスチナ、北方領土・・・

page 3

21世紀、世界は「収斂」する

page 4

東欧の民主化について

page 5

党と国家は別の存在

ソ連ではいま、大変重大な出来事が進行中です。状況として時期として、大変緊張したものがあります。こうした時に 2 週間ほど国を離れ日本に来るということは大変なことですし、大きな仕事でもあると考えています。

ペレストロイカは過去 4 年間進行してきて、今日、大変重大な、責任の大きい時点に到達しています。すなわち、いまこそ言葉から行動へ転換すべき時なのです。国を変革する、これは構造的な変革抜きでは不可能なことです。

さて、記者会見というのは、長いお話をするよりは質疑応答のために存在すると私は理解しています。ましてや今朝、大変長い講演をし、少なからぬ方々は、そこにもいらしたことでしょう。ですから早速、本筋の仕事に移りたいと思います。

#### 質疑応答

**安藤(フジテレビ):** ゴルバチョフ議長は西側の国々にとっては、改革の先頭を走るヒーローのように受けとめられています。しかし、先日の「アガニョーク」誌の世論調査では、ゴルバチョフ政権のもとでペレストロイカが成功すると考えている人は意外に少ない、という悲観的な結果が出ていました。ペレストロイカそしてゴルバチョフ議長に対する評価というのは、もっと冷めたものなのでしょうか。

ペレストロイカは歴史的必然

**サハロフ:** 私は、ペレストロイカは、ソ連における歴史的な必然であると理解しています。ペレストロイカよりも、もっとラジカルなものが必要であると考えています。なぜなら、ペレストロイカは“部分的変革”を意味しているからです。しかしいまわれわれが必要としているのは、より抜本的な変革です。

それからこの世論というものは、ペレストロイカが矛盾をはらんで進行しているのと同じように、確かに大変矛盾しています。それはまた現実のプロセスの反映でもあります。われわれはとくに、農村住民

の意見に耳を傾ける必要があると思います。世論調査に参加した農民の 70% ぐらいは、今後の状況悪化を懸念しています。

こうした人々が、いま進行中のペレストロイカというプロセスが「後戻りのできないものだ」という確信を持たない限りは、彼らがこのプロセスに果敢に、積極的に参加することにはならないでしょう。すなわち、彼ら自らが土地を受け取り、その土地を耕し、そこで仕事をしない限り、そうしたことと無関係には国を今日の状況から救い出すことはできないのではないかと思います。

信頼の問題、なかんずく指導部に対する信頼という問題が重要です。指導部に対しての信頼なくしてペレストロイカは不可能である、と私は考えます。

そのためには、抜本的な構造的な変革が緊要です。こうした改革は、人々がペレストロイカに確信を持つことによって、はじめて実現可能なものになると思います。しかし現時点では、人々は指導部に不信感を強めています。何よりも指導部の言葉と行動のギャップを、民衆は見てとっているのです。このギャップは、様々な問題、あらゆる分野において、少なからず見てとれます。

ジャーナリストの皆さんであればご存じの週刊誌「論拠と事実」の最近号にも、世論調査の結果が載っていますが、すべてそれらは私がいま申しあげたことを傍証しています。

**カーン(アラブニュース):** ソ連はアフガニスタン問題について、非常に素晴らしい決断をしましたが、北方領土の問題について、またパレスチナ人が人間として自分の国をつくる自由の権利に対して、博士はどのようなご意見をお持ちでしょうか。

パレスチナ、北方領土・・・

**サハロフ:** 毎回この二つの問題について、私の意見を聞かれるたびに思うことがあります。それは、利

益のぶつかり合っている問題が存在した場合、一般的には妥協が必要であるということ、そして衝突した利害のその双方を尊重するという、二つの原則です。千島列島の問題については、今日午前中の講演（慶応大学）の中でお話したわけですが、あえて繰り返して申しますと、これは日本にとっては大変に重大な、深刻な問題だと私は考えています。

一般的に申しあげまして、すべての戦争、当然、第二次世界大戦もそうですが、戦争そのものが勝者の領土を拡大するものであってはならない、と私は信じています。

ただし北方領土につきましては、ソ連にとっても、決して単純な問題ではありません。次の一連の理由によって、この問題はわれわれにとっても複雑なものなのです。まず第一に、多くのソ連人が戦後千島に移住しています。ですから彼らの生活、彼らの運命も考慮に入れなければならない、ということがいえます。次に、この“領土”というものは、ソビエト連邦の戦略的な利害と絡むものです。

というわけで、すべて大変複雑な問題、矛盾が絡み合っているわけです。ですから先の原則に従って、妥協が必要であるというのが、私の立場です。

その妥協の一つのバリエーションですが、例えば千島におけるソ連軍の軍事基地の存在について、日ソ双方で討議するというのも、問題解決の一つの方法ではないかと思えます。

パレスチナ問題についても、やはりこれも複雑な問題です。多年にわたりこの問題は、国際世論に大きな影響を与えてきました。これについても妥協を模索する必要があると考えます。また、衝突した利害関係というものを、双方の立場から理解すべきだと思います。そしてこの問題を解決するためには、交渉がぜひとも必要であると考えています。

その問題解決に当たり重要なのは、イスラエルの生存権の承認です。イスラエル国家の権利、つまりイ

スラエルが安全に存続するための権利、これをぜひとも承認する必要があります。そういうものに関しての交渉の中で、双方のぶつかり合う利益を尊重しながら、問題解決を妥協によって模索していく必要があると考えています。

**ドナエフ（ノーボスチ・文学新聞）:** 21世紀の人類のグローバルな発展について、どういう展望を持っていらっしゃるでしょうか。そしてまた日本は、このグローバルな諸問題の実験室であると理解できるわけです。例えば人口過剰の問題あるいは高齢化の問題など、まさに実験室の様相を呈していますが、どのようにお考えでしょうか。

21世紀、世界は「収斂」する

**サハロフ:** 2番目の問題からお答えします。私はかなり以前から、日本については多くのことを考えておりました。日本は前世紀の半ばごろ、数世紀にわたる鎖国状態から脱皮しました。また第二次世界大戦後、軍国主義を拒否して発展を遂げた国です。日本国民の内的なポテンシャルを土台にして、未来への大きな飛躍を遂げた国、これが日本であると思います。その意味で日本は、問題解決の可能性、また未来の発展の可能性の一つのモデルを提供している、と私は考えています。

例えば人類全体の問題となりつつある人口過剰、人口密度の問題、あるいは資源の枯渇、人口構成比の急激なる変化の問題など、これらはすべて確かに日本の社会現象の中に現われています。

また日本は、大変大きな教訓を提供しました。それはいわゆる自分たちの道が、唯一例外的に正しい発展の道であるというような、独善的な考え方を排除しているということです。また日本は軍国主義を拒否した国でもあります。その意味で、この軍国主義の拒否というモデルを日本が提供していることを、われわれは深く考慮に入れるべきだと考えます。

多くの人から私はいろいろな考えを学んだわけで、

その人々の教えをここで繰り返すことにはなりますが、私の世界発展の概念は、いわゆる収れん論に帰着します。すなわち二つの対立する社会、経済的に異なる体制、つまり社会主義と資本主義の接近は必要なプロセスであると考えます。この接近は、複数主義に依拠してはじめて可能になると思います。複数主義へ向けて変化を達成していくことによって、両体制のいわゆる収れんが可能になると思います。

かつて古典的な資本主義は、1930年代の歴史の逆コースを歩むような出来事を通じて、また社会矛盾の激化の結果として、複数主義を生むに至りました。これを私は、いわゆる収れん現象であると考えられるわけですが。ソビエト以上に他の国々ではこの複数主義、プルーラリズム（多元主義）が、今日、広く開花を遂げています。

わが国のペレストロイカもわが国の中における収れんに向けてのプロセスであると、私は理解しています。指令的なシステムの拒否、またイデオロギーの独占、そして一党による権力独占の拒否によって、ペレストロイカの新しい段階が開かれると思っています。このペレストロイカは、国内のペレストロイカのみならず、世界の収れんに向けての責任のある段階として、いまわが国で進行中であると理解しています。

人類はいま、重大な、グローバルなペレストロイカの時期を迎えていると思います。今日、軍事的な対立は、全地球、全人類を破滅させ得る段階にまで到達しています。核戦争の危険は現実のものであり、またエコロジー（環境、生態系）の危険も、大変にグローバルで現実味を帯びた問題として台頭してきました。各国が対外競争力をつけようとし、そのためにやっきとなった結果として、エコロジーの問題が極めて危機的な問題としていま持ち上がってきています。このような状況下において、全世界のグローバルな協力抜きでは破滅を回避することはできないでありましょう。ですからいま唯一、この世界で可能なまた必要なものは、先ほどから申しあげております両体制の収れんです。

**田畑 (TBS):** いま東ヨーロッパの国々は大変激しい変化を経験しています。その変化の方向は非常に素晴らしいものだと思いますが、あまりにも変化が激しい。それで、どういうことが起こるか分かりませんが、多くの人々の命が失われたり、たくさんの血が流されたりということが起こりはしないか。そういう不安があるのですが、その点についてどうお考えでしょうか。

東欧の民主化について

**サハロフ:** ソ連での出来事、また東ヨーロッパ、なかんずくハンガリー、ポーランドでいま進行中の出来事は、歴史そのものによって準備された当然の出来事であると私が考えます。ですから、これらの国で進行中のプロセスができるだけ早く、迅速に、そしてラジカルに進むべきだと思います。これらの変革が民主主義の枠内で、また正常なプロセスの枠内で進行すべきだと考えています。ハンガリー、ポーランドの人々の成功を祈るべきだと思います。

そして西側諸国は、これらの国に進行中の民主化、そして複数主義へ向けてのプロセス、また多党制導入への動きを助成すべきだと考えます。このような条件抜きでは、これらの国は今後存続することは大変困難でしょう。

また付け加えますと、もはや1956年（ハンガリー動乱）あるいは1968年（チェコ事件）のようなことは繰り返されないであろうと確信しています。そういうことが二度と起きないことが、まさに当該諸国におけるプロセスが自然に進むための確固たる保証となるべきです。

**内藤 (産経出身):** まず第一点は、いまフィンランドを訪問中のゴルバチョフ議長が今朝の新聞を見ますと、ポーランド、ハンガリーには内政干渉しない、という宣言をしています。ただこれには、ワルシャワ条約機構およびコメコンにとどまるという条件を一つ付けています。これについてコメントしていた

だきたい。

第二点は、最高会議議長と共産党書記長の兼務についてです。権力が一人の人物に集中することは非常に危険だ、そのポストに就いた人によってソ連がどう変わるか分からない、これは変えなくてはならない、ということを博士はたびたびおっしゃっています。これを一体、どのように改革したらいいのか。また、その可能性があるのでしょうか。

党と国家は別の存在

サハロフ：第一の質問ですが、きょうの新聞を私は残念ながら読んでいませんので、何が一体どうであったかということを確認していません。

ただ原則論として申しあげることができるのは、ポーランドやハンガリーの内政に不干渉の保証を与えることは大変重要です。ただし、内政不干渉の条件として政治的な要求を提示しても、受け入れ難いことだと思えます。なぜなら、国際的な機構、とくにワルシャワ条約機構などの軍事的な機構から脱退するあるいはしないというのは、当該国の内政問題だからです。コメコンの加盟問題も同じです。これもやはり、当該国の内政です。それについてうんぬんすることは、正しくないと考えます。

ただし、もしゴルバチョフ議長が内政不干渉を強調するために、比較の問題として例にあげてワルシャワ条約機構とかあるいはコメコンについて言及したのであれば、話は別問題かもしれません。しかしいかなせん私は彼の演説を読んでいませんので、これ以上詳しいことを申しあげることができません。内

政干渉するぞ、と脅かすのは正しくない、とだけは確かに言えると思います。

二つ目の質問ですが、一人の人間の中に、党と国家の指導力が並立するのは正しくないと考えています。そういう状態は結局、党が事実上わが社会、わが国全体の指導機関であることを認めることになります。そういう状態は正しくない。私の考えは、国家元首は党の指導ポストを拒否すべきだということです。その観点から、わが国の憲法第6条は正しくないと考えています。なぜなら、この第6条は、党の支配を明文化した条項だからです。この部分が変化しない限り、わが国の今後のペレストロイカは常に左右に揺れながら前進することになるでしょう。真っすぐの道を進まないということです。

通訳 徳永晴美

文責・編集部

#### アンドレイ・サハロフ氏略歴

1921年モスクワ生まれ。父親のドミートリー氏は有名な物理学者。42年モスクワ大学物理学部卒業。レベジェフ物理学研究所での研究を経て核兵器開発グループに参加。53年史上最年少(32歳)でソ連科学アカデミー正会員に。50年代末から核開発の中止を主張し始め、60年代には民主化、人権問題などに活動の場を広げる。73年プラウダなどが一斉にサハロフ批判を始めるなかで、75年にノーベル平和賞を受賞するが、授賞式には出席できずに婦人が代理出席した。80年国家反逆罪でゴリキー市へ流刑。86年12月16日ゴルバチョフ書記長が電話で「流刑解除」を通達、モスクワへ戻る。88年ソ連科学アカデミー幹部会員に選出される。同年30年ぶりの海外旅行として訪米し、レーガン大統領と会談。89年人民代議員に選出された。